

61 受けついでゆく記憶のその先は読めない  
歴史年表のうらおもて

佐佐木朋子

『パロール』(平成十八年)の収録とあるが、今の状況下で読むと、とても不気味な歌である。特に「その先は読めない」が怖い。人類は、知識も技術もすばらしすぎるほどに発展させたが、幸せな暮らしが保証されるようになったかという、決してそうではない。予測もしなかったことが次々と人類を襲う。コロナ禍、想定外の自然災害、民主主義の逆走、資本主義の行き詰まり・・・歴史は勝者の記録と言うが、今の時代はどのように年表に記されるのだろうか。

62 天井のエビは死にたるその後も値段付  
けられ評価されいる 田中徹尾

言われてみれば肉や魚は殆ど「死にたるその後」に値段を付けられ、評価される。目の前の天井のエビも今まさに、死にたるその後を評価されている。さて、人の場合はどうだろう。作者は労働災害や過労死に向き合う職業だったため、生きている時か

らきちんと評価されずに使い捨てにされる人々を多く見てきた。ふと、死後も評価されるエビに対して、死んでも何も評価されないで忘れられる多くの人がいるということに違和感を持ったのだ。人の死が、エビの死よりも軽んぜられるなんて。こんな不条理があつていいのか、いいはずがない。

63 シャンプーがいくつもあればよいのに  
うに平和がいくつもあればよいのに

大野道夫

ドラッグストアの棚に様々なタイプのシャンプーが並んでいる。仕上がりがサラサラのもの、ボリュームが出るもの等々いろいろな髪質に対応している。髪質だけでも人それぞれこんなに違う。ましてや価値観や考え方、感受性はさらに人それぞれだ。だから、平和に対する考え方も人それぞれ。それらが、他を排することなく共存できたらどんなにか素晴らしいだろう。そう、棚に仲良く並んでいるシャンプーのように。でも、それはまず不可能だ。下句が悲しい。

64 暗きアトリエにて生み出されし人体が

水平線の窓辺に置かる 経塚朋子

出来上がったばかりの「人体」が水平線を望む窓辺に置かれていた。私には、この歌は芸術の永遠性を暗示しているように思われる。水平線は、確かに存在するが蜃気楼のように、行けども行けども辿りつかない。「生み出されし人体」は、この世に存在し始めた瞬間から水平線という永遠と対峙させられたのである。詞書には「アルベルト・ジャコメッティ展」とあるので針金のような人体だろうか。永遠の水平線と向き合っている人体は、美しいものを希求し続ける芸術家そのものだ。

65 良いことが二つ良くないこと一つ名の  
みの春の夜を眠らな 細溝洋子

暦の上では春だがまだ寒いといえど二月だ。その頃の良くも悪くないことと言えば、私は合格発表を想像する。二校合格一校不合格、といったところか。人の運がだいたいプラスマイナスで均衡が保たれているとすると、この結果は上出来である。しかし良くないこと、「一つ」の響きが強